



地道に コツコツ

川崎ゆきお

地道にコツコツとやっていた人が最期には勝つ。という話もある。ただ、その場合、レベルが下がったからではないかと思える節がある。勝利ラインがだ。また、強いライバルが次々に倒れることもある。生き残っただけなのかもしれないが、その間、じっと辛抱してコツコツとやり続けるのは苦しいだろう。諦めなかったから勝ったというのものもあるが、使われすぎている。あるレベルでの戦いの場合、誰も諦めなどしないだろう。練習を全くしないで試合に出るスポーツ競技も、今はないはずだ。

しかし、本当に地道にコツコツというのは野心家にはできない。よほど元気のない人か、そういうコツコツ行為が好きな人なのだ。コツコツが好きなのは、同じようなことをずっとやるのが好きな人かもしれない。コツコツなので、大きな変化はない。コツコツ、ボツボツだ。そして歩みも遅そうで、成果がすぐに出ない。ところが、このコツコツは、コツコツが楽しいのかもしれない。または、他にやることがないか、できそうなことが、地味なことしかないかだ。本当はもっと派手な展開を望んでいたのかもしれない。

つまり、手がないので、コツコツやる。という感じだろうか。

同じ繰り返しを機械的にやるのを好む人がいる。不思議と飽きないで、その繰り返しを楽しんでいるのだ。これは無限ループに入ってしまう、そこで恍惚状態になっているわけではないが、それに近い酔いがあるのだろう。頭の中で、そういう快感の汁でも出るのだろうか。

精神的には、そういうことをやっていることが安定に繋がり、将来にも繋がるとなると、安心してコツコツに没頭できる。

そのため、地道にコツコツにも色々ある。

「僕も地道にコツコツと畑を耕したいんだが、耕す畑がない。ネタがなくてねえ」

「地味な仕事なら、いくらでもありますよ」

「最近では機械がやっているからねえ。減ったよ」

「地道にコツコツって、どんな感じですか」

「のんびりと、ゆっくりだよ。それこそ地面を這うように一步一步。ところが最近のコツコツ仕事はキツツキのように忙しい。一人じゃできないほどだ。これでは畑に鍬をゆっくり入れるような雰囲気じゃない。まあ、そんなゆっくりさんでは使い物にならないけどね」

「じゃ、意外と地道にコツコツって、あるようでないのですね」

「そうだね。そんなことができる人は幸せ者だ。よほど環境がいいか、恵まれた人なんだ」

「挽き臼があるでしょ」

「はあ？」

「ああ、いきなりすみません。臼です。豆なんかをすりつぶしたり、薬を作るとき使うような。粉を作る石臼です」

「ああ、見たことがあるよ。昔の映画で、老婆が臼をまわしているのを」

「ああいうのがいいんでしょ」

「そうだねえ。婆さんでもできる軽作業で、豆が粉になっていくのを見る楽しみもあるしねえ」

「これがジューサーやミキサーになってしまうと、地味にコツコツ感がなくなるでしょ」

「いやだねえ、あの機械。後始末が大変だ。洗わないといけなからねえ。作っているときは瞬

時で楽だけど、実際に時間を取られるのは洗い物だよ。しかし、洗い物も悪くはないよ。ただ、洗い物ばかりをやるのならね」

「家事なんてどうでしょ、部屋の掃除なんて」

「まずは掃除機の掃除から始めないといけないから、それがたいそうでねえ。うまく外せないんだ。仕掛けが分からない。ゴミが溜まるあの容器のようなやつ。あれが本体から外れないのですよ」

「説明書があるでしょ」

「ああ、見たけど、よく分からん」

「まあ、適当に触っていると外れますよ」

「やはり、箒や雑巾がいい。そちらの方が地道にコツコツと掃除をしている気になる。まるで修行しているようにね」

「お寺の雑巾かけのようなものですか」

「そうそう。ああいう感じに持ち込まないと。修行の一環だよ」

「そうになると、地道にコツコツやっていけば、何とかなるというような条件は少ないですねえ。何でもいいのなら色々ありますが、それさえやっていけば、食 いっぱぐれないとか、やればやるほど生活が安定するとかの条件を付ければ、ないですねえ。簡単そうで」

「そうだろ。だから、地道にコツコツをしたいんだけど、ないんだよ。困った話だ」

「一番ありふれているものだと思っていましたが」

「珍しいんだよ。特権階級向けだよ」

「石臼をまわして豆をつぶしているお婆さんがですか」

「そうだねえ。今じゃ希少価値だ」

地道にコツコツ、ありそうでなかったりするようだ。

了